

砺波平野の散居村に関する持続的研究と その継承活動による地域の建築文化への貢献

佐伯 安一 殿

富山県五箇山の合掌集落（相倉、菅沼）は、現在世界文化遺産に登録されている。また、砺波平野の散居村は独特の集落景観として知られ、農水省の田園空間整備事業に採択されている。五箇山の合掌集落も砺波平野の散居村も戦前期から学術的に注目されてきたところである。

そうした中で、同氏は、富山県の農村集落の習俗を民俗的な視点から明らかにするのみならず、民家の普請過程や構法、間取りや住まい方などを明らかにしてこられた。とりわけ、住居集落の経年変化を持続的に明らかにしてこられたことは極めてすぐれた業績である。その研究業績は、合掌造集落や散居村の保全措置にあたり大きな貢献を果たし、高く評価されてきている。

同氏は、長年、砺波市立砺波散村地域研究所に勤務され、さらに砺波市立砺波郷土資料館館長も務められるなど、富山県文化財保護審議会委員として、あるいは「となみ野地区田園空間博物館」事業、「散居村ミュージアム」整備事業などに関わって主導されるなど、30年以上にわたり、富山県の伝統的住居や聚落とそれを支える居住文化の保存と継承に尽力してこられた。

合掌集落の世界文化遺産登録に当たって重要な知見を提供されたこと、また、以上のような様々な事業を展開されることなど、同氏が、近世から様々に変容しながらも維持されてきた砺波平野の住文化の継承に大きな役割を果たしてこられたことは特筆に値する。

地域の文化・伝統を踏まえたまちづくりのあり方の追求は、日本のみならず世界各地における大きな課題である。砺波地方のアイデンティティを確立した点においても、地域民俗学を追求した奥の深さ、期間の長さにおいてもその功績はすばらしく文化賞に相応しい。

よって、ここに日本建築学会文化賞を贈るものである。